

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

# 赤十字 NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

<https://www.jrc.or.jp>

JANUARY 2022 NO.980

令和4年1月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第980号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

# 1



わたしも赤十字 献血の協力者 写真左から、<sup>ふじいたいち</sup>藤井太地さん、<sup>わだやよい</sup>和田弥生さん、<sup>よしだなずな</sup>吉田那沙さん(京都府学生献血推進協議会メンバー)【P.4で紹介】

## 特集

# 生きたかった、だから闘った

赤十字の最新情報をSNSでチェック!

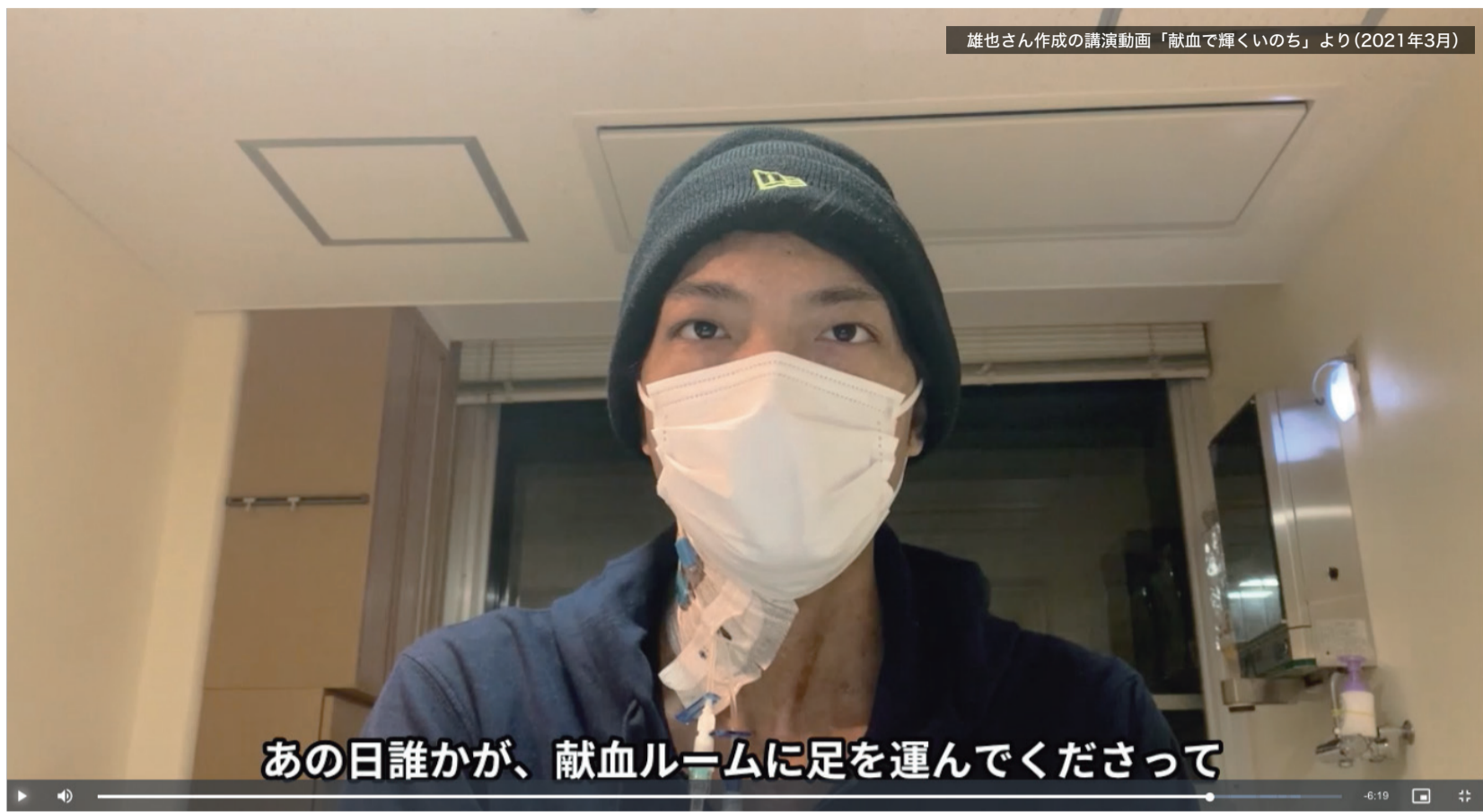


赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 **日本赤十字社**  
Japanese Red Cross Society

# 生きてたかった、ただだから闘った



京都大学に入学後、19歳で希少がんを患い、さらに白血病を発症。入院退院を繰り返し、23歳で世を去った山口雄也さん。病魔と闘い続けた彼の日々を支えたのは「誰かの献血」でした。亡くなる少し前、体調が良いときに雄也さんは献血を呼び掛ける1本の動画を病室で撮影しました。今回はその動画の中から雄也さんのメッセージと、雄也さんを見守った方々の声をお届けします。

「献血というイメージとしては血が足りない方への『血液のお裾分け』みたいなふうを考えていらっしゃる方が国内には結構多いと思うんですけど、実際のところはそんなものじゃなくて、こういう『戦場』とも呼べるような状況で本当に死の淵に立たされながら、自分で血を作れない人、血を待ち望んでいる人が、その先に待っているということをもっとたくさんの方々に知っていただきたいと思います」

「2021年初頭に白血病の再発がわかり、3度目の移植をしなければならぬという状況になりました。医師からは『もう移植をしないでおく』という選択肢も提示されました。今回の移植の成功率が(医師の経験的に)1割未満だったからです。自宅で過ごしているんな思い出を作り、穏やかに最期を迎えようという選択肢。移植をしなければこの春に僕は死んでしまう。僕は悩まばきました。恐怖というより自分としての最期はどういう形で終わるのがいいのか…」

「僕の人生がここで終わるとするならば、それはとても短いものだったのかもしれませんが。これだけたくさんの人に献血に足を運んでいただいで、貴重な血をいただいて、献血されている方々の“命を助けたい”という望みからすると、それができない患者かもしれません。でもこの1年で多くの経験を得られました。いろんな人と会い、おいしいものを食べ、去年はできなかった卒業論文も書いて、大学を卒業することもできました。そのすべてが、これまでの献血・輸血がなければなし得なかったことです。あの日誰かが、献血ルームに足を運んでくださって、その血が僕の体に届いた。1日1日、まるでリレーのように僕の命をつないでくださった。」

…より多くの患者さんに、温かい血が不足の心配なく、**遍く行き渡ることを心より願っています**

(2021年3月撮影、山口雄也さんの講演動画「献血で輝くのち」より抜粋)



やまぐちゆうや 山口雄也さん

1997年10月18日、京都市生まれ。2016年、京都大学工学部地球工学科に入学。2021年4月京都大学大学院工学研究科に入学、同年6月6日、白血病のため逝去。闘病を記録したツイッターのフォロワーは8万8000人以上。ブログ「ヨシナシゴトの捌け口」「或る闘病記」、note「くっちのおと」、著書『がんになって良かった』(徳間書店)

【病歴】

- ・2016年11月、希少がん「縦隔原発胚細胞腫瘍」が見つかり、切除手術
- ・2018年6月、急性リンパ性白血病の診断を受け、10月に骨髄移植
- ・2019年4月、白血病再発、6月にハプロ移植\*
- ・同年12月に再発も、がん消失
- ・2020年12月、急性骨髄性白血病の発症
- ・2021年3月、2回目のハプロ移植\*

\*ハプロ移植とは、患者とHLA(白血球の型)が半分一致した血縁者などがドナーになる移植法。HLAが完全一致するよりもがん細胞を攻撃する効果が高いが、患者の臓器を攻撃するGVHD(移植片対宿主病)も強く出るため、リスクも大きい。

**動画で見る赤十字**

山口雄也さんの献血に対するメッセージや彼の闘病記を動画でご覧いただけます。詳しくはこちら(1月中旬公開)⇒

## ご両親から見た、雄也さんの「生きて証し」

最初のがんの闘病中から、SNSやブログを通じてたくさんの方のメッセージを発信してきた雄也さん。その上さらに新聞やネットニュースなどのメディアが大学に通いながら病と闘う雄也さんに注目し、彼を取材した。だが、彼の両親がそれらの情報を知るのは、いつも一般の人の目に触れるのと同じタイミング。雄也さんの母・七美さんは苦笑しながら、こう語る。「取材を受けたことは、ほぼ事後報告でした。雄也の SNS やブログの存在も、本人ではなく知人から教えてもらいました。こんなこと書いていたよと。病人扱いされるのが嫌な子で、怖かったりつらかったりする思いを口にせず、ブログなどで発散していたのでしょう。私たち親も隠れた読者でした」。両親は彼の発信活動を静かに見守り、尊重してきた。

しかし彼の発信活動は、時に雄也さん自身に向けて逆風となることがあった。匿名の心無い言葉の刃の数々。それでも、雄也さんはコロナ禍の献血者数の減少に焦燥感を抱いて、メッセージを発信、このことで議論に巻き込まれ精神的なダメージを受けた。父・陸雅さんは振り返る。「コロナ禍でも、血液を待っている人がたくさんいる。より多くの人に献血に意識を向けようために、罪悪感を感じながらも、わざと乱暴な書き方をした。何も病状が悪いときに、そんなつらいことをしなくても、と思わずにいられませんでした…」

白血病の治療中は自分で血液を作れなくなるので、ほぼ毎日、大量の輸血が必要になる。B型という赤血球の型だけでなく、特に雄也さんは繰り返された輸血の影響で、HLA という白血球の型も厳密に指定した特殊な輸血が必要だった。七美さんは輸血を待ち望んでいる雄也さんの姿を一番近くで見



(左)「雄也は治ると信じていました。雄也が亡くなった時も実感が湧かなくて…」と語る陸雅さん (右) 生前のまま残されている雄也さんの部屋で、雄也さんが当選した東京オリンピックのチケットを手にする七美さん。小中高校と陸上部だった雄也さんは東京オリンピックの陸上競技を生で見ることを楽しみにしていた



(上) 雄也さんの遺影。最後の入院の前月、友人と伊勢に旅行した際に撮影された (左下) 2016年、京都大学の入学式に参加した雄也さんご両親 (右下) 雄也さんの遺作『がんになって良かった』と言いたい。自分の体験を示すことで、読者ご自身の「生」を見つめてほしいという願いがこめられた

守っていた。「輸血をしてもらおうと楽になる、と本人も言っていました。リハビリも輸血の後だとスムーズに動けたり、効果が目に見えて分かるので、「リハビリは輸血の後にしたい」と話すこともありました。毎回、医師が採血データを見て必要な血液(血液製剤)をオーダーしますが、特殊な血液なので、届く時間がその日によって違います。夕方や、夜遅くに届くこともあり、私が待ちきれず、血液はいつ届きますか、と看護師さんに聞いたことも。でも、届かないことはなかったのが本当に感謝しています。コロナ禍で献血者数がかなり減っている時期だったのに…」

「最後の移植の時、治る見込みは1割未満だと言われていても、長い時間を掛けて、いつか回復できると信じていました。それは本人も同じだったと思います。座ることもできない完全介助の状態になっても少し状態が上向きになると歩きたい、リハビリしたいと生きる意欲を見せていました。意志の強い子だったので、最後まで、諦めていませんでした」(陸雅さん)

彼のブログ・SNS・動画には、生きて証しを残す、使命を果たす、という言葉が繰り返し出てくる。実際に、がん闘病の体験をつづった本を出版し、減少した献血者数を増やすことを目的に多くの情報発信をしたことで、**彼が生きて証しはこの世界に存在し続けている。そして、ただ存在するだけでなく、そのメッセージは今なお人々の心を強く動かし続けている。**

**私が見た雄也さんの闘い**  
そして献血が、もっと広まることを願って… H・Aさん(21歳・大学生)

「雄也さんとは2019年3月に知り合いました。知り合った後に、彼は白血病の再発で入院退院を繰り返しましたが、LINEや電話で連絡を取り合い、ツイッターで書けないような冗談を言い合っていました。治療のことや難しい話ではなく、楽しい話がしたかったようです。彼が弱音やネガティブな発言をするのはあまり聞いたことがありません。SNSだと意見をはっきり言う強い人、という印象ですが、実際の彼は穏やかでやさしく、ひょうきんな性格の人でした。

5月の終わりにツイッターでリハビリで歩行する動画がアップされたとき、私は思わず『すごい!』と声を上げました。起き上がることも難しいと言っていたのに、歩いている! 彼は治る! と。…彼がリハビリの動画を撮り、SNSで発信することは自分を鼓舞すると同時に、同じように病氣と闘う仲間に見守ってほしいと思ったのかもしれませんが。彼がSNSで献血を呼び掛けたように、いま、私も献血に行くたびにSNSで報告をしています。毎月のように報告していると、友人が献血に興味を持って『私も行ってみたい』と声を掛けてくれるようになりました。先日は、友人5〜6人で待ち合わせて一緒に献血しました。入院していた彼に『献血行ってきたよ』と伝えると『ありがとう』とうれしそうに言葉を返してくれたのを覚えています。血液を待っている人がいる。だから、私は献血を続けるし、もっと献血が身近なものになるといいなと思います」

雄也さんが命を懸けて発信したメッセージ。それを受け取った人々の中で「献血」という命のリレーが広がり、そのバトンはこの先の未来にも引き継がれていきます。天命を全うした山口雄也さんのご冥福を心より祈ります。

H・Aさんと友人たちの献血記念写真



特集連動 血液疾患と闘う人を救うために

# 献血と同時にできる2つの「登録」

特集で紹介した山口雄也さんは、亡くなる少し前に献血を呼び掛ける動画を作成し、その中で2つの登録をお願いされています。

①骨髄バンクへのドナー登録、②「HLA適合血小板」献血登録、この2つは血液疾患の患者の「命綱」となるものです。

## 1. 骨髄バンクへのドナー登録

2021年10月末現在、骨髄バンクドナー登録者数は53万6642人。この中で、移植に必須の白血球の血液型“HLA(ヒト白血球抗原)”の遺伝子型が患者と完全一致する確率は極めて低く、非血縁者間では数百～数万人分の1人。雄也さんの場合は8人でした。その中から、精密検査や入院などの条件をクリアする方は、さらに数が絞られていきます。数少ない適合者の中から移植を行わなければなりませんので、多くの方にご登録いただくことも重要ですが、患者さんと適合した時に**実際にご提供可能となる「継続的な意思と健康」**をお持ちの若い方の登録が特に望まれています。



### ドナー登録について

骨髄・末梢血幹細胞の提供における条件をご理解いただいた方のみ、ドナー登録を行うことができます。

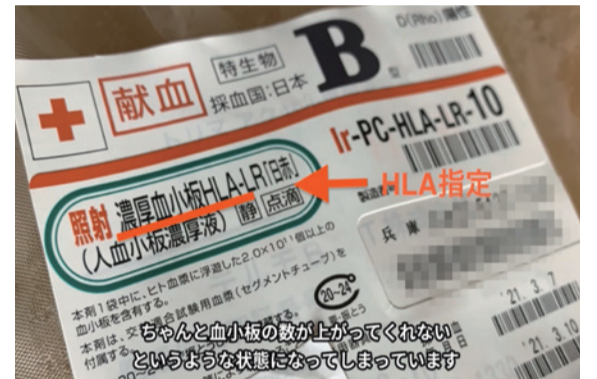
詳しくはこちら  
→→→



## 2. 「HLA適合血小板」献血登録

「HLA 適合血小板」献血は、すでに献血ルームで血小板献血をされ、HLA登録をされた方がご協力可能となるものです。

雄也さんのように頻回な輸血によって体内に「抗HLA抗体」ができてしまうと、骨髄移植と同様に「HLA型」を指定した**オーダーメイドの血小板輸血が必要**になります。その場合は、**日赤が全国の適合者に協力の依頼**を行います。依頼の際には献血会員サービス「ラブラッド」のシステムも活用されますので、この機会にぜひご加入ください。



山口雄也さん作成の動画「献血で輝くいのち」より

## 「トライ! はたちの献血」キャンペーンスタート!

昨年に引き続き、山之内すずさんとぺこばのお2人がキャンペーンキャラクターに。新CM「トライ! はたちの献血」編では、新成人を迎えたすずさんが振り袖姿を披露。ぺこばは紅白のラグビージャージに身を包み、献血の妖精にふんしています。ひとりひとりの献血の積み重ねが、明るい未来につながっていくことを呼び掛けます。



## 献血 Web 会員サービス「ラブラッド」

ラブラッドは全国の献血会場のweb予約が可能になり、ポイントをとめて記念品と交換できるなど、便利でお得なサービスです

詳しくはこちら  
→→→



わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介いたします。

## 献血=楽しいから続くボランティア もっと「日常」になってほしい



献血の協力者

よしだ なずな

吉田那沙さん

滋賀県大津市 / 20歳 / 京都大学3年生

私が所属する京都学推<sup>\*</sup>は京都府の大学生が中心となって活動する学生献血推進ボランティア団体です。特に若年層の献血者を増やすために、街頭で呼び掛けをしたり、SNSで献血について発信したりしています。このような学生団体は47都道府県すべてにあり、私は今年度、全国の学生献血推進団体の代表を務めています。

私にとって献血は、物心ついたときから身近なものでした。祖父は献血バスを見掛けると献血をしていました。幼い頃は、よく献血バスの近くで祖父を待っていました。そのため、献血ができる16歳の誕生日に献血ルームに行きました。「16歳になった記念に行ってみよう」という軽い気持ちでしたが、一瞬の小さな痛みだけで、自分でも誰かの役に立てるのだと喜びを感じ、それからは何度も献血をしています。そして、献血ルームに通ううちに京都学推の存在を知り、加入しました。

学推では、さまざまな形で献血を推進していますが、その活動の中で、「献血に興味はあったけれどきっかけがなくて、学推の活動を見て初めて

献血に行った」「学生さんが一生懸命呼びかけていたから献血しようと思った」などと言っていたことがあります。私達の活動が、命をつなぐ優しい行動のきっかけになったのだと実感でき、とてもうれしい瞬間です。

私達は、同世代の若者に向けて献血を推進してきました。これからは、献血できるようになる前の小中高生にも献血の大切さを伝えていきたいと考えています。小さい頃から献血について知り、「日常」のこと、ごく普通のこととして献血に協力してくださる方が増えるといいなと思っています。

### 初めて献血される方へ

輸血に使用する血液は、まだ人工的に造ることができず、長期保存することもできません。10～30代の献血協力者数はこの**10年間で34%(約90万人)も減少**しており、少子高齢化が進む中、患者さんに血液を安定的に届けるためには、**若い世代の献血へのご理解とご協力が必要**となります。

献血へのご協力について詳しくは →→



<sup>\*</sup> 京都府学生献血推進協議会

新年のご挨拶

# “分断”を乗り越える“連帯”

日本赤十字社社長 大塚義治

新しき年を迎え、皆様のますますのご健勝とご清栄をお祈りするとともに、常日ごろ、日本赤十字社の活動に温かく力強いご支援をいただいておりますことを心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルスの感染が確認されてからすでに2年を超えましたが、世界はいまだ懸命にパンデミックとの戦いを続けている状況にあります。

昨年の新年のごあいさつの中で私は、「何よりも憂慮されるのは、社会における“分断”が拡大したことだとも言われ、もしそうであるならば、私たちが取り組まなければならない新たな課題が生まれていることを意味しているのかもしれない」と申しました。

実際に、ウイルスへの恐怖がいわれない偏見と差別を生み、時には赤十字病院で働く医療スタッフなどに対しても、心ない言葉が投げかけられるようなことがあったと耳にしました。

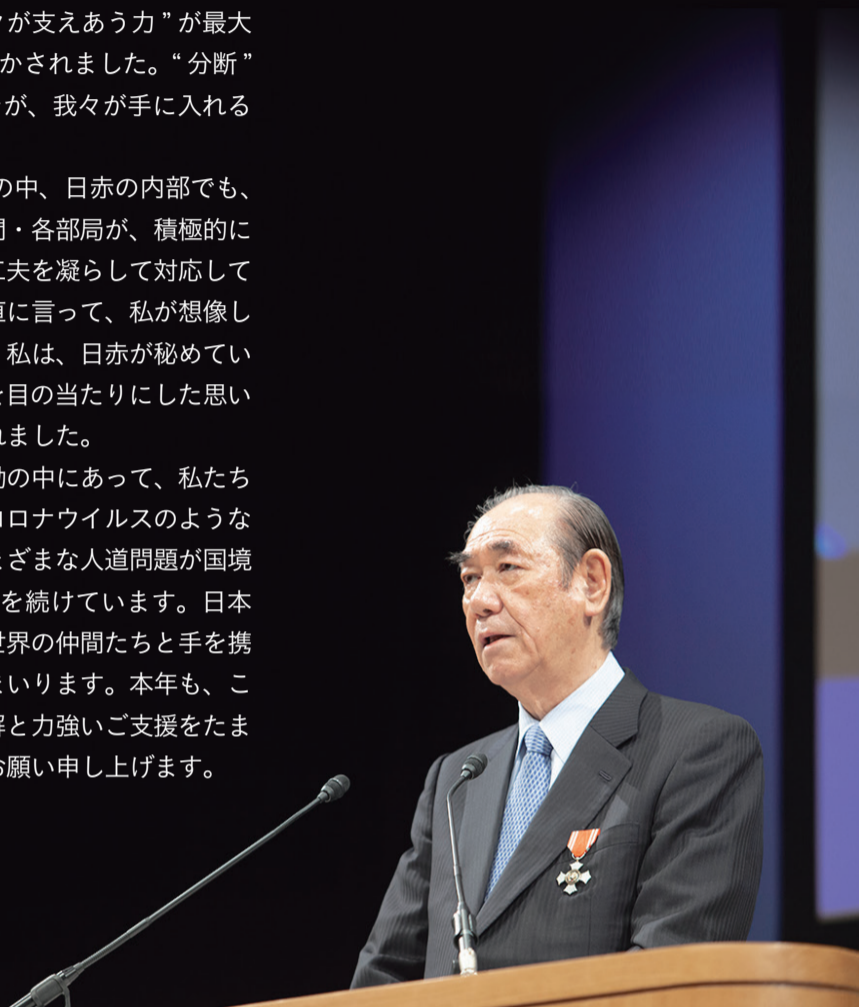
しかし、そんな時に励まされ、勇気づけられたのは、それらをはるかにしのぐ多くの方々からの応援の声と心のこもったお力添えでした。

私たちはこの経験を通じ、「新型コロナウイルスに立ち向かうために必要なのはワクチンや薬

だけではない。この“人々が支えあう力”が最大の武器となるのだ」と気づかされました。“分断”を乗り越える“連帯”こそが、我々が手に入れるべきものだと思うのです。

これまでの困難な状況の中、日赤の内部でも、支部、施設、本社の各部門・各部局が、積極的に相互に協力し、連携し、工夫を凝らして対応してくれました。それは、卒直に言って、私が想像していた以上のものでした。私は、日赤が秘めている「底力」と言うべきものを目の当たりにした思いがして、少し心を動かされました。

国内外の急激な社会変動の中にあって、私たちが直面する課題は、新型コロナウイルスのような感染症に限りません。さまざまな人道問題が国境を越えて拡大し、“変異”を続けています。日本赤十字社は、これからも世界の仲間たちと手を携え、地道に活動を続けてまいります。本年も、これまで同様、温かいご理解と力強いご支援をたまたわりますよう、よろしくお願い申し上げます。



## 今月のクイズ

難易度：★★★

今年4月から成人年齢が20歳から18歳に引き下げられます。では、18歳からできるようになるものは、次のどれでしょう。(複数回答可)

シメント  
全血献血は16歳から可能です。成分献血と骨髄ドナー登録は……

1

飲酒

2

骨髄の提供

3

成分献血

4

大型自動車の運転

# 東大月間クイズに挑戦!

知識を深める赤十字QUIZ

出題 東京大学クイズ研究会(TQC)

知ってるつもりでも、意外と知らない赤十字のこと。東大クイズ研が手掛ける問題にあなたは正解できる!?

1月は「はたちの献血」キャンペーン期間です。皆さんは献血をしたことがありますか? まだ協力したことがないという人は、献血について知識を広げることが協力への第一歩になるかもしれません。まずはこのクイズに挑戦してみてください。



# AREA NEWS

全国各地  
あなたの生活のすぐそばで  
日本赤十字社の活動は行われています。

## 全国 今年も皇后陛下から、全国に冬の趣、柚子柄の手拭い

12月9日は、日赤の名誉総裁である皇后陛下のお誕生日。例年、この日に合わせて600本の日本手拭いが日赤に御下賜されます。手拭いは日赤の老人保健施設や特別養護老人ホームなどの施設入所者一人一人に手渡しされ、入所者は皇后陛下のお気持ちを受け取って大喜び。歴代の皇后陛下の手拭いの御下賜は、昭和、平成、令和と引き継がれ、今年で66回目を迎えました。



手拭いの柚子の柄は、皇后陛下がお選びになったデザインです

**東大脳に挑戦! クイズの答え**

**3 成分献血**

国の成人年齢が18歳に引き下げられますが、もともと200mL献血は16歳から、成分献血は18歳からできます。「はたちの献血キャンペーン」は昭和50年から展開されていますが、成人した若者に社会貢献を推奨したものであり、「20歳」は献血が可能になる年齢を示すものではありませんでした。また、骨髄バンクへのドナー登録は18歳から可能ですが、骨髄・末梢血幹細胞を提供できる年齢は20歳以上です。

## 山形県 震災から10年続く芋煮会 赤十字奉仕団の「寄り添う心」

日赤山形県支部は11月27日、東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市唐桑町の大沢地区で被災者への支援活動を実施。かねて継続してきた支援活動は、震災から10年という節目を迎えました。当日は赤十字奉仕団員9人が現地を訪問、手作りの芋煮や玉こんにやくなどを振る舞ったほか、赤十字関係者、大沢地区の住民と共にメッセージツリーを作り、交流を深めました。



晴天の下で提供された芋煮や玉こんにやくは山形名物

## 長野県 戴帽式で誓いを新たに… 1年生にナースキャップを授与

11月24日、長野県の諏訪赤十字看護専門学校で戴帽式が開催され、28人の1年生に看護師の象徴であるナースキャップが授与されました。式に参列した1年生は4月の入学から半年間の看護教育を経て、いよいよ病院実習に臨むことになります。ナースキャップを授与された学生たちは、先生や保護者らが見守る中「患者に寄り添える看護師を目指す」と誓いました。



戴帽式に臨んだ1年生は、これから誠実に学びを重ねていく

## 奈良県 寛仁親王妃信子殿下がご臨席 奈良県赤十字大会が開催

日赤奈良県支部は11月30日、支部創立126周年と奈良県赤十字血液センター創立50周年を記念する奈良県赤十字大会を奈良県コンベンションセンターで開催しました。日赤名誉副総裁の寛仁親王妃信子殿下ご臨席のもと、有功章の授与や、奈良市地区赤十字奉仕団の荻野末子委員長と、奈良県学生献血推進協議会の鳥島澄美会長による活動成果報告が行われました。



感染症対策のため参加者は被表彰者のみ約350名に絞って開催

## 徳島県 「人道の心」を育むために… ドイツ人捕虜の実話、紙芝居で

日赤徳島県支部は、11月8日に「鳴門市ドイツ館」を遠足で訪れた中学生に向けて紙芝居を実施しました。同館では、第一次世界大戦にドイツ兵捕虜を人道的に扱ったことで知られる板東俘虜収容所の史料を展示。赤十字人道紙芝居語り部ボランティアの2人が史実に基づいた紙芝居を披露すると、生徒からは「教科書で勉強しなかったことも学べてよくわかった」と感想が。



赤十字精神に基づき運営された収容所の物語が描かれている

## 東京都 群馬県 大阪府 「九血機」に「年の差タッグ」 全国各地で広がる献血協力の心

コロナ禍で献血協力が減少する中、さまざまな形の献血活動が各地で実施されています。東京都では警視庁第9機動隊が「九血機」と名付けた献血運動を実施。昨年4月から1年半で延べ1000人の献血協力を獲得、東京都赤十字血液センターは同隊に感謝状を贈呈しました。群馬県では11月8日、前橋市地区赤十字有功会が27年ぶりに前橋市立前橋高等学校での献血を実施。平均年齢78歳の有功会の「赤十字活動には世代を超えたタッグも必要」との熱い思いに、高校生が惜しみなく協力しました。大阪府赤十字血液センターは11月20日、青少年赤十字加盟校の清明学院高等学校で学内献血を実施しました。生徒や教職員だけでなく、生徒たちの熱心な呼びかけに応えた地域の人も献血会場に足を運びました。



「9機」と献血をかけてニックネームは「九血機」



献血してくれた生徒には有功会から記念品を贈呈 生徒会が中心となり、地域住民にも呼びかけた

## 香川県 千葉県 中国四国 九州八県 災害や事故に備えて各種訓練が継続中 エリア全域にまたがる大規模訓練も

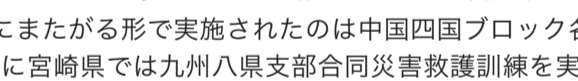
赤十字ではコロナ禍が続く今も災害や事故に備えた各種訓練を積極的に続けています。日赤香川県支部は11月2日に大規模地震を想定した石油コンビナート総合防災訓練に参加。11月18日の災害支援物資輸送訓練にも参加し、海路以外のルートが遮断されたケースの海上輸送について関係各所との連携を深めました。千葉県の成田赤十字病院は、11月11日に成田国際空港で行われた航空機事故消防救難総合訓練に医療救護班と災害派遣医療チームDMATが参加。61機関から約700人が集結した大規模な訓練で、救護体制の強化を図りました。11月12・13日の2日間、中国・四国の全域にまたがる形で実施されたのは中国四国ブロック各県支部合同災害救護訓練。また、11月28・29日に宮崎県では九州八県支部合同災害救護訓練を実施、web会議システムを通し支部の枠を超えた活動のレベルアップに取り組みました。



被災地が必要とする飲料水や非常食などを小型船で海上輸送



訓練には避難所の住民役として地域の男女ボランティアも参加



感染症流行下における効果的な合同訓練の手法についても検証を行った

## 常任理事会開催報告

令和3年11月26日、令和3年度第7回の常任理事会が開催されました。  
1 規則の改正について (日本赤十字社病院建物建設等資金規程)  
審議の結果、付議事項については原案のとおり議決されました。また、本社業務執行体制の見直しについて協議し、令和3年度上半期事業報告、予算の補正にかかる社長専決事項等の決定状況についてそれぞれ報告しました。  
※オンラインによる開催となりました。

## 理事会開催報告

令和3年11月26日に、令和3年度第2回の理事会が開催されました。  
今回の理事会では付議事項はありませんでしたが、本社業務執行体制の見直しについて協議し、令和3年度上半期事業報告について報告しました。  
※オンラインによる開催となりました。

## 常任理事会開催報告

令和3年12月17日、令和3年度第8回の常任理事会が開催されました。  
今回の常任理事会では付議事項はありませんでしたが、本社業務執行体制の見直しについて協議し、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う対応状況(医療事業)、令和4年「はたちの献血」キャンペーン、予算の補正にかかる社長専決事項等の決定状況について報告しました。  
※オンラインによる開催となりました。

## 天皇后両陛下から御下賜金

12月21日、天皇后両陛下から、日本赤十字社の事業奨励のために金一封を賜りました。この御下賜金は、災害等による被災者救援事業のための資金として使用されます。

ニッポンの赤十字ゆかりの地を巡る vol.10

# 赤十字名所紀行

「手縫いの赤十字旗」三上剛太郎の功績に見る赤十字の心

青森県下北半島・佐井村には、戦場で「手縫いの赤十字旗」を掲げた医師として名を残す三上剛太郎の生家があります。日露戦争の真ただ中の1905年(明治38年)1月、満州で兵士の治療にあたる剛太郎らの仮包帯所がロシア・コサック騎兵に包囲されました。全滅の危機に瀕し、剛太郎が白い三角巾と赤い毛布を縫い合わせ赤十字旗を作って掲げたところ、騎兵は攻撃をやめて立ち去り、ロシア兵1人を含む70余人の負傷兵の命が救われました。1963年スイス・ジュネーブで開催された「赤十字100周年記念国際博覧会」にて、この「手縫いの赤十字旗」が紹介され、世界中から惜しみない賞賛を浴びました。戦場で作られた赤十字旗は現在も大切に保管(日赤青森県支部の玄関ホールに展示)されています。また、2019年に三上剛太郎生誕150年を迎えた際、佐井村赤十字奉仕団が、旧三上家住宅までの道案内の目印として設置されている「手縫いの赤十字旗」を模した小旗を一つ一つ手作りでリニューアル。佐井村には現在も剛太郎の「仁愛の精神」が受け継がれています。

三角巾2枚を縫い合わせ、赤い軍用毛布を縫い付けた「手縫いの赤十字旗」

保存された生家は貴重な和風医院建造物として青森県重宝に指定されている ※公開期間は例年4月29日～10月31日

「赤十字を応援！」プレゼント パートナー企業紹介 vol.21 富士フイルムBI秋田株式会社

## 会社の成長が寄付へとつながる社会貢献の仕組み

企業になくてはならない複合機やプリンターを扱う「富士フイルムBI秋田株式会社」。秋田エリアで7000台超の販売、保守の実績があることから、地元企業から厚い信頼が寄せられています。「地元のお客様に支えられている恩返しに、地域の安心安全に貢献できることを」と20年以上前から日赤への寄付を続けています。2016年からは自社製品の販売台数に応じて寄付を行う取り組みをスタート。社員のモチベーションもアップし、会社の成長が寄付につながるという社会貢献の仕組みができあがりました。さらに、地域の中で何かできることはないかと考え、環境マネジメントシステム(ISO14001)の一環として2003年より地域の清掃活動を開始。ここ10年ほどは雄物川南岸河口(ももさだ海岸)にて、ゴミ拾いを中心に社員一人当たり約5時間の清掃を実施。会社全体で地域の環境を守る活動を推進しています。

2021年5月から6月にかけて、計10回(総活動時間456時間)のゴミ拾いを行った

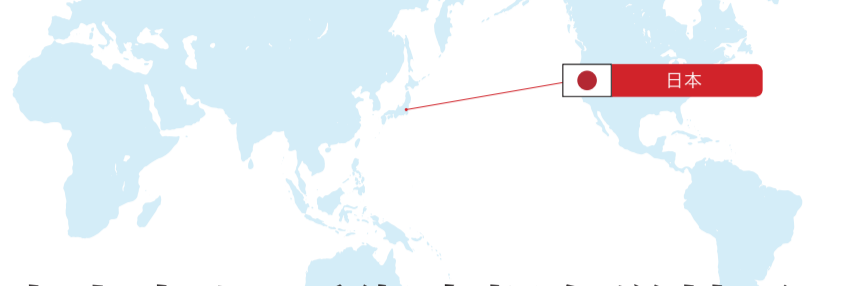
上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS 1月号を手にした場所(例/献血ルーム) ⑥1月号に関するご意見・ご感想 ※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします。

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 1月号プレゼント係 FAX/03-6679-0785 WEB応募/右の2次元バーコードからご応募ください。1月31日(月)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます

# WORLD NEWS

アンリー・デュナン記章受章発表



日本



2015年、第20回国際赤十字・赤新月社連盟総会で発言する近衛連盟会長(当時)

## 赤十字人・近衛忠輝名誉社長の輝く功績

日本赤十字社の近衛忠輝名誉社長がアンリー・デュナン記章を授与されることが発表されました。

1964年にボランティアとして入社以来、50年以上にわたって人道支援の第一線で活躍されてきた功績を振り返ります。

1965年に創設された「アンリー・デュナン記章」は、国際赤十字・赤新月社運動が2年に1度、個人に授与する最高位の賞です。このたびの近衛名誉社長の受章は、選考委員会の満場一致の決定だったといわれています。

世界192の国と地域の加盟社を束ねる国際赤十字・赤新月社連盟(以下連盟)の会長を2009年より2期8年間、任期満了まで務め上げた近衛氏は、歴代では初のアジア地域から選出されたリーダーでもありました。

近衛氏を知る赤十字の関係者たちは、その印象を「聞き手」と語ります。とかく国際会議のような場では、実力があり、弁舌も雄弁な欧米などの大国の声が幅を利かせるものです。しかし近衛氏はどんなに小さな国の意見も尊重し、その中身に徹底して耳を傾けました。その誠実な姿勢と静かなる情熱が、人道支援に不可欠な「連帯の精神」を醸成するのに一役買ったことは高く評価されています。

国際会議の場で、歴代会長でおそらく初めて行った4カ国語(英語・フランス語・スペイン語・アラビア語。いずれも連盟の公式な作業言語)によるスピーチも、会議の出席者に大きな感銘を与えました。語学に堪能な近衛氏ですが、そのいずれにおいてもネイティブ(母国語)ではありません。しかし「言葉で寄り添う」ことがどれだけ相手に敬意を表し、

勇気付けるものであるか、若い頃の「ロンドン貧乏留学」やバックパッカーとして世界を巡った経験で熟知していたのでしょうか。

発音の難しいアラビア語に挑戦しようと近衛氏を突き動かしたのは、2011年に勃発、のちに長期化し、赤十字のボランティアや職員の殉職を招く事態となったシリアでの内戦に憂慮してのことでした。

品格ある穏やかな人柄で知られた一方で、近衛氏は静かなる情熱を持った、徹底した現場主義でもありました。連盟会長に就任した年の翌年のハイチ大地震に始まり、東日本大震災、シリア紛争、エボラ感染拡大の西アフリカなど、被害の甚大な災害の現場には必ず足を運ぶなど、任期8年間で移動した距離は地球36周分の約147万3009km。70歳を超えて、長時間のフライトや整備の不十分な悪路の移動をものともしない気力と情熱には同行者も舌を巻きました。

人道支援の慌ただしい現場を連盟会長のようなトップが訪問して現場に負担をかけないよう配慮しつつ、近衛氏は「連盟会長自らが支援を国際的に呼びかけることの意義」、そして「現場の最前線で活躍するボランティアの活動が広く認知され、その活動が保障されること」を重んじました。

近衛氏は日頃から「赤十字を支えるのはボランティアである」と強い信念をもっており、その肝いりの施策として、ボランティアの義務や責任だけでなく、その権利を保障することをうたった「ボランティア憲章」の採択にもこだわりました。自身も赤十字ボランティアだった近衛氏が連盟会長を退任したときには、加盟社代表のみならず、多くのボランティアたちからも感謝が表明されました。

長年にわたって、その「人道第一主義」を貫いてきた近衛名誉社長。その精神は、これからも世界で活動する赤十字ボランティアと共にあることでしょう。



2016年、シエラレオネ。現地赤十字職員、ボランティアから大歓迎を受ける近衛連盟会長(当時)



© ICRC

## 赤十字、世界の「現場」から

supported by ICRC

赤十字国際委員会(ICRC)が展開する紛争地での保護活動や避難民支援。その活動現場で切り取られた、知られざる世界の姿、世界の課題。

2011年10月、アフガニスタン。ICRCの運営する整形外科センターでは、両脚を失った幼い少女が歩行訓練を行っていた。少女の父親は訓練に付き添い、娘の義足の具合を何度も確かめた。同センターでは、外科手術のほか、リハビリや、義肢・車椅子の部品などの製作も行っている。

ノーベル賞候補にもなったICRC  
理学療法士の  
メッセージ ⇒



ICRCは、地雷などで手足を失った患者に無償で治療やリハビリを提供している。また、障害者自身が義肢や人工装具を作る技師や理学療法士になるための職業訓練も行い、同センター職員の9割以上が元患者。社会復帰やスポーツ参画も促す活動はタリバン政権下でも継続中である。